

モーゼス・マイモニデスの

『喘息論』について

石 渡 隆 司

モーゼス・マイモニデスは十二世紀の前半に、イスラム文化の西の中心地であったスペインのコルドヴァに生まれたユダヤ人学者で、中世紀を通じてもっとも卓越したユダヤ思想家の一人として知られた人物である。彼の主著『迷える者への手引』はどんな哲学史の本にも取上げられていないほど、中世の西欧思想界にとって重要な役割を果たした書物で、今日でも二、三ヶ国語に訳されて少からぬ読者を得ている。

彼は当時のイスラム・ユダヤ圏の多くの学者の例に見られるように、哲学、神学を修めた後さらに医学の理論と実践とを習得した。彼が青年期に達した頃、コルドヴァに超保守的イスラム政権が誕生し、それまで比較的寛大であった異教徒に対する政策が一挙に弾圧的となったのに伴っ

て、彼の一族はモロッコに逃れ、さらにイスラエルへと逃亡しなければならなかった。

三十歳を少し過ぎた頃、マイモニデスはエジプトに移住し、一二〇四年に七十歳で死ぬまでそのままエジプトに留った。彼はその間、すぐれた臨床医としての名声を手に入れると同時に多くの医学書を著わした。アラビア語で書かれた彼の医学書の一部は、今日までヴァチカンをはじめとするヨーロッパの主要な図書館に所蔵されている。その中には、ヒポクラテスの箴言の註釈、ガレノスの医学理論の要約などのほか、ここに取上げた『喘息について』をはじめ、『養生法』『モーゼスの箴言』『毒をもつものと下毒剤について』『性交の効罪』『医学問答集』『痔について』『薬物の名称について』などが含まれている。

彼の医学理論が、原則的には、当時のアラビア医学に理論的基盤を与えていたガレノスに拠っていることは言うまでもないが、彼が随所でガレノスの誤りを指摘したり、批判したりしている点も見逃すことができない。マイモニデスに帰せられている「ガレノスは貴いが、真理はもっと貴重」という言葉は、彼の権威に対する自由な態度と自己の

観察に対する強い自信のほどがよく表われている。

ここに紹介する『喘息論』は、マイモニデスが六十歳を過ぎた頃、サラデインの息子で皇太子に当る者の喘息治療のため、宮廷待医としてアレクサンドリアに招聘された折に書かれたものと考えられている。この書物は、十三世紀末から十四世紀にかけてラテン語に訳されたうえ、さらにヘブライ語にも翻訳された。いくつかの西欧の図書館にはそれらの翻訳の手稿も保存されている。

演者は一九七二年スペインで開催された第五回国際中世哲学会に参加した折に、偶々コルドヴァ市にあるマイモニデスの記念館を見学する機会に恵まれ、そこで彼の医学書の手稿のコピーを眼にすることができたが、その後この書に英訳があることを知り、数年前ようやく入手することができた。今回の報告はこの英訳にもづくものである。

この書物は、喘息患者が注意し、心がけるべき生活上の事柄、とくに食事療法について、その材料や調理の仕方、食事の分量、回数、時間などについて、さらに整腸のための方、睡眠や覚醒、入浴、マッサージ、性交などの刺激の効罪、薬剤の効能やその調合法などを扱った十三章の論

述からなっている。

これらの論述の中で、今日われわれがとくに注目すべきことは、喘息治療に対するマイモニデスの考察が、心身医学的立場からなされている点である。彼は喘息患者に対する治療は、この病気をひき起す種々の原因の正しい分析に基づいて行われねばならないこと、なかでも、患者の個人的な体質、年齢、性別はもちろん、その人の気質や生活習慣や特殊な環境など、知りうるかぎりでの患者の人的全貌を考慮に入れなければならないことを強調している。

われわれが注目すべき第二の事柄は、この著作全体が、中世のイスラム圏における医学理論の成立基盤を明かしている点にある。マイモニデスは、この書物の中で、主としてガレノスの権威によっているほか、ヒポクラテス、アリストテレスなどのギリシャの自然学者に加えて、アラビアやユダヤの医学の先達を多く引合ひに出し、彼等の説をも紹介している。われわれはこの著作の中から、中世のいわゆる「ガレニズム」の折衷的側面と、その崩壊過程の一端とをうかがい知ることができると思われる。

(岩手医科大学)